

み はら けん いち
三 原 健 一

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文第 213 号
学位授与年月日 平成17年2月17日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 アスペクト解釈と統語現象

論文審査委員 (主査)

教授 中村 捷 教授 金子 義明
助教授 小泉 政利

論文内容の要旨

本論文はアスペクト(相)を論じるものである。アスペクトには、(1a,b)のような文法的アスペクトと、(1c,d)に見られる意味的アスペクトの2種がある。英語における文法的アスペクトは、完了相(1a)・進行相(1b)とも、アスペクトを表す専用形式である助動詞(have/be)を用いる。

- (1)a. John had made a bookshelf when I came home.
- b. John was making a bookshelf.
- c. John made a bookshelf in 6 hours.
- d. John loved Mary when he was a college student.

他方、意味的アスペクトは、動詞に内在化された意味自体で完了や進行を表すものである。(1c)では、「6時間で本棚を作った」という完了的事態が表されている。それに対して(1d)では、「メアリを愛していた」という動作の進行(感情の継続)の側面が取り出されている。本論文で扱うものは、アスペクトのうち意味的アスペクトである。

第一部(第一章から第四章まで)では、理論の細部に亘る議論は極力避け、記述的側面からの一般化を抽出する。第二部(第五章から第八章まで)では、第一部で抽出された記述的一般化が「なぜ」成立するのかを、生成文法の極小理論(minimalist program)の枠組みを援用することで理論的側面から解明する。全体的には日英語比較に基づく比較統語論という体裁を取る。

第一章 動詞類型とアスペクト限定

広く引用されるVendler(1967)の動詞4分類では、動作に必然的な終わりがある限界動詞を、動作が瞬間的に終了する瞬間動詞と動作に時間を要する継続動詞に区分し、前者が到達動詞、後者が達成動

詞と称されている。しかしながら、動作の瞬間性・継続性は世界に関する知識などに依存することが多く、しばしば語用論的な揺れを見せる。例えば、「爆発する」は瞬間動詞とされるのが通常であるが、「爆弾が爆発する」と「超新星が爆発する」では動作に要する時間が甚だしく異なる。「花瓶を壊す」と「ベルリンの壁を壊す」などでも同じ論点が成立する。

本章では、まず、未完了の逆説、「～かけの」構文その他を論拠として、到達動詞と達成動詞の峻別は二次的な区分に過ぎないことを論じた。その結果現出するのが、状態動詞、行為動詞、過程動詞という動詞3分類である。行為動詞は動作に必然的な終わりが無い非限界動詞、過程動詞は必然的な終わりがある限界動詞である。(なお、本論文では状態動詞は主論点としない。)

ところが行為動詞においては、(2)が非限界的事態を表すのに対し、(3)が限界的事態を表すといったことが起こり、動詞のみでは「動詞分類」が不可能なように思える。

(2)a. John read *The Minimalist Program* for two days.

b. John pushed the cart for hours.

(3)a. John read *The Minimalist Program* in two days.

b. John pushed the cart to the station in 30 minutes.

しかし、非限界動詞を限界動詞に変換する要因は、(3a)における項*The Minimalist Program*の解釈(全てを読んだ)か、(3b)での付加詞to the station(着点句)の存在のいずれかに収束する。つまり、これらの項・付加詞が事態を終了させるアスペクト限定詞として機能する結果、本来的には非限界動詞であるものが限界動詞に変換されていると言える。

本章では、アスペクト限定を動詞分類自体からは切り離し、項限定詞と付加限定詞が関わるアスペクト限定の問題として捉えることにより、個々の動詞のみでそれら本来の所属先を決定する原則を抽出した。すなわち、付加詞は随意的要素なのでこれを含まない(2b)が基本形式であり、「push/押す」などは行為動詞であるとする。また、「read/読む」なども本来的には行為動詞であり、(3a)は項限定詞の関与による現象であるとする。簡単に言えば、「for~/~/の間」と共起する動詞は非限界性の行為動詞であるということである。

また、動詞分類の問題と連動して、これまで所属が明確にされてこなかった「悩む」「苦しむ」などの心理動詞についても、行為動詞であることを明示的に示した。

第二章 数量詞連結構文

(4)のような数量詞連結構文(数量詞遊離構文)を規制する原則について、日本語生成文法の分野では、Miyagawa(1989)の相互c統御条件が定説とされてきた。

(4)僕の友達が2人、新宿で田中先生に会ったそうだ。

しかしながら、この条件には極めて重大な反例が多く、日本語に限ってみても妥当な一般化とは言えない。さらに、英語を初めとして相互c統御条件とは無関係な言語も多く、汎言語的に見ても問題の多い規定である。

本章ではまず、(5a-d)のようなデータ観察に基づき、数量詞連結構文はアスペクト性制約に規制される構文であることを示した後、(非)限界性の質的差異による(5)に見る動詞類型の下位区分を行った。

(5)a. 子供がおもちゃをもう3つ壊した。[+限界動詞]

b. 私はソナタをコンサートで3つ演奏した。[±限界動詞]

c. ?校長先生は生徒を朝礼で3人誉めた。[α限界動詞]

d. *菜穂子は親友をそれでも3人信じた。[-限界動詞]

つまり、(5a) の「壊す」ような限界動詞がこの構文を成立させ、(5d) の「信じる」のような非限界動詞が成立させないのだが、この両極間に (5b,c) のような類型が存在する。(5b) タイプは、本来的には非限界動詞であり（「ソナタを30分の間演奏した」）、直接目的語が項限定詞として機能することにより、限界動詞用法を獲得するタイプである。他方 (5c) タイプは、「今学期」など、終了点を有する期間中に「生徒を誉める」という出来事が複数回起り、積算すると「生徒が3人」であったという解釈にすると正文となるタイプである。

(6) 校長先生は、今学期、生徒を朝礼で3人誉めた。

そして、アスペクト性制約の観点から見れば、経路句を伴う (7a)、移動動詞 (7b)、取り立て詞を加えた (7c)、テイル文 (7d)、そして状態述語文 (7e) における文法性の差も十全な説明が可能なことを示した。

(7)a. ?公園をゆつくりと3つ散歩した。/ok トンネルを続けて3つ通り抜けた。

b. ?巨大な石が麓の方に2つ転がった。/ok パトカーが事故現場に2台急行した。

c. ?学生が私の本を4人買わなかった。/ok 学生が私の本を4人しか買わなかった。

d. ??学生が図書館で5人勉強した。/ok 学生が図書館で5人勉強していた。

e. *北摂地域では箕面の滝が3つきれいだ。/ok 公園がこの団地には3つある。

なお、アスペクト的観点からすると、英語の数量詞連結構文は比較的単純な構文である。英語において連結を許す数量詞は all/both/each (普遍数量詞) に限定されているが、これらの数量詞を用いた場合、常に (数量的な) 限界的事態を描写することになる。従って、(8a) の限界動詞のみならず、(8b) の非限界動詞でもこの構文が成立する。この状況は日本語でも全同である。

(8)a. The students all came to my office.

b. The students all admire Prof. Yamada.

(9)a. 学生が全員私の研究室に来た。

b. 学生は全員山田教授を尊敬している。

第三章 二重目的語構文

英語には、与格型 (10a) と受益者型 (10b) の2種の二重目的語構文があるが、日本語には受益者型 (11b) が存在せず、これを正文とするには、「花子のためにケーキを焼いた」、あるいは「花子にケーキを焼いてやった」という形式にする必要がある。

(10)a. John gave Mary a ring. (John gave a ring to Mary.)

b. John baked Mary a cake. (John baked a cake for Mary.)

(11)a. 太郎は花子に指輪をあげた。

b. ??太郎は花子にケーキを焼いた。

本章における最大の主張は、与格型を構成する動詞は日英語とも非限界動詞であり、英語では受益者型を構成するが、日本語では構成しない動詞は限界動詞であるという点に存する。ただ、二重目的語構文には様々な要因が複雑に絡み合っており、問題の核心に触れるには、それらを丁寧に解きほぐす作業が要求される。

第一に、英語の二重目的語構文では事象が必ず終了する必要があるのに対し、日本語では終了しなくてもよいといった言語事実がある。例えば (12) (13) などである。

(12)a. *John taught Mary French, but she didn't learn French.

b. *John gave Mary the money, but she never got it.

(13)a. 太郎は花子にフランス語を教えたが、彼女はついに習得しなかった。

b. 太郎は花子にお金を渡したが、彼女は受け取らなかった。

上記の事実は、英語では間接目的語がアスペクト限定詞として機能するのに対し、日本語では機能しないことを示している。(このことに関連して、これまで体系的には論じてこられなかった、授受の成就という問題についても新たな観察を提示した。)

第二に、日英語において与格型を構成する「あげる/give」「支払う/pay」や、英語では受益者型となる(が日本語ではならない)「買う/buy」「入手する/get」などといった、多かれ少なかれ瞬間的に動作が遂行される動詞の(非)限界性を認定する必要がある。本章では、①着点句への到達合意の有無、②程度表現との共起可能性、③テイルとの整合性という論拠から次の認定基準を抽出し、与格型を構成する上記のような動詞は非限界動詞であり、受益者型の動詞は限界動詞であるという結論を導いた。

(14) 開始時点基準

a. 動作の開始時点のみを示す動詞は非限界動詞である。

b. 開始時点での動作+その後の動作を示す動詞は限界動詞である。

さらに、日本語の「間接目的語」を標示する「に」は後置詞であり、この与格所有者が項として機能することにより、「太郎は花子に指輪をあげた」などの文が、英語のJohn gave Mary a ringに対応する二重目的語構文と認定されることも論じた。

第四章 所有者上昇構文

本章ではまず、(15a,b)の所有者上昇構文における動詞句(VP)部分の構造を、それぞれ(16a,b)のように確定した。英語の構造確定は容易であるが、日本語の場合は議論を要する事項が多々あり、以下の①②で述べる言語事実がその証拠となる。(なお、二重対格制約のため(15a)を嫌う話者がいるが、その場合は、「花子を、右足{だけ/も}蹴った」などの形にして読んでもよい。)

(15a. 太郎は花子を、右足を蹴った。

b. John hit Bill on the arm.

(16a. [VP花子を [VP右足を蹴った]]

b. [VP [V hit Bill] on the arm]

①日本語における2つの「を」格句は構成素をなさない(17a,b)。②所有者((15a)での「花子を」)は所有物((15a)での「右足を」)を非対称的にc統御する(17c)。

(17a. *太郎が[花子を頭]と[昌子を腹を]叩いた。(等位接続)

b. *太郎が叩いたのは[花子を頭(を)]だ。(疑似分裂文)

c. 太郎が花子だけを、頭を叩いた。(ダケと頭(a head)の作用域)

(16a)の構造における「花子を」はVP付加詞であり、「を」は格助詞ではなく、「～について言えば」という提示機能を有する後置詞である。この機能は、脱落(ϕ で示す)を許さない点や、語順の入れ替えが不可である点において、(19a)の認識動詞構文と共通する特質を示す((19d)の構造も併せて見られたい。)

(18a. 刑事は[犯人が被害者{を/* ϕ }、ハンマーで後頭部を殴った]現場に行ってみた。

b. *犯人は後頭部を、ハンマーで被害者を殴った。

(19a. 私は隣人の親切をありがたく感じた。

b. 美穂は、[私が隣人の親切{を/* ϕ }ありがたく感じた]理由を理解したようだ。

c. *私はありがたく隣人の親切を感じた。

d. … [VP隣人の親切_iを [VP [spro_iありがたく]感じた]]

この構文を規制する制約のうち比較的知られていないものに、(20) (21) のようなアスペクト性制約がある。それぞれ (a) の非限界動詞がこの構文を成立させるのに対し、(b) の限界動詞が成立させないのである。これについては理論的装置を用いた説明を要する事項なので、その理由の解明は第六章で論じた。

- (20) a. kiss Mary on the cheek
 b. *break John on the foot

- (21) a. 花子を、右腕を掴まえる
 b. *花子を、右腕を折る

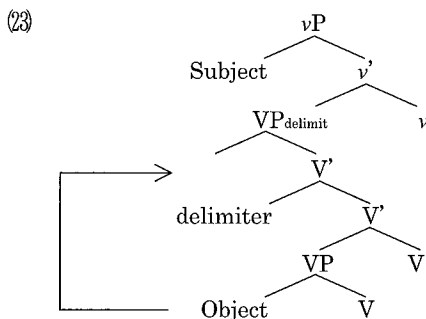
また英語では、所有物が定冠詞を有し、非制限的修飾語を加えることが可能なのに対し、日本語ではこれらが非文を導くという重要な差異が見られる。

- (22) a. Sam beat a man on the stout shoulder.
 b. *花子を、この肩を殴った。
 c. *花子を、頑丈な肩を殴った。

(22) の観察は、英語の所有物が完全な名詞句（正確にはDP）であるのに対し、日本語のそれが不完全な名詞句（NP）であることを示唆しており、「*頭が太郎に花子を叩かれた」といった受動文が成り立たないことと連動している。（英語でも、*The shoulder was beaten a man onなどが言えないが、この理由は、日本語の場合とは異なりthe shoulderがPP（on句）中に含まれるからである。）

第五章 限界的動詞句

本書の根幹をなす提案は、非限界的事態を表す文と限界的事態を表す文では、そもそも句構造が異なり、後者が、vP/VP間に限界的動詞句（VP_{delimit}）を有する(23)の構造を取るという点に存する。（前者は(23)からVP_{delimit}を省いた通常の構造となる。便宜上、日本語の語順で示す。）



VP_{delimit}中には、連結数量詞、結果述語、着点句など、delimiter（アスペクト付加限定詞）として機能する要素が基底生成される。そして、目的語が項限定詞となる場合は、矢印で示したように目的語がVP_{delimit}の領域に移動する。移動を駆動する要因については第六章で論じた。(23)の句構造を設定する根拠として、(24) (25)で示す証拠の他、「も」と否定対極表現、頻度副詞と目的語の作用域などがあるが、紙幅の関係で2つのみ挙げる。

第一に、「そうする」構文において目的語を残せないというのが標準的見解であるが、(24a)の非限界動詞とは異なり、(24b)の限界動詞では目的語を残すことができる。（「そうする」構文では、VPもしくはVが「そうする」で置き換えられる。）

- (24) a. 花子がフランス語を学んだので、*昌子はイタリア語をそうすることにした。
 b. 太郎が車を黄色に塗ったのを見て、次郎はバイクをそうすることにした。

このことは、(23)において目的語を移動した後に、着地点の下にあるV'（もしくはVP）を「そうする」で置き換えると考えれば説明が可能になる。他方、非限界動詞ではVP_{delimit}が生じないので、(23)にお

ける、目的語を含む下位のVPを置き換えざるを得ず、その結果、目的語を残すことができないのである。

第二に、着点句と数量詞の作用域に関する事実がある。

(25a. 子供 (のため) に 3つの幸せを願った。(非限界動詞)

b. 駅まで 3つの荷物を運んだ。(限界動詞)

(25a) では、子供 > 3つの幸せ (子供 = 1人) という作用域解釈しかないが、(25b) では、駅 > 3つの荷物 (駅 = 1つ) と、3つの荷物 > 駅 (駅 = 複数) 双方の解釈が可能である。(25a) の構造は(20)であるので、「子供」が「3つの幸せ」を非対称的にc統御している。一方、(25b) では、着点句の「駅まで」が(23)でのdelimiter位置にあるので、移動前には「駅」が「3つの荷物」をc統御しており、移動後にはその逆のc統御関係となるのである。

(20) [VP子供 (のため) に [V 3つの幸せを願った]]

本章では他にも以下のことを論じた。

①事態に限界点を設定し得るのは、直接内項 (本論文の用語では項限定詞) と間接内項 (付加限定詞) のみであり、外項 (主語) がこれに関与しないというTenny (1994) の一般化が、(23)の構造化から簡潔に、かつ明示的に説明できる。

②英語の非能格動詞が、自動詞であるにもかかわらず「目的語」的要素を従えるJohn ran his sneaker threadbareのような奇妙な振る舞いが、(23) の構造化のもとに説明される。

③非限界性の漢語サ変動詞では、「局長が部下を叱責するのを見て、部長も自分の部下をそうした」のように目的語を残すことが可能であるが、この問題を巡って、従来論じられてこなかった「そうする」置き換えに関する意味的要因を深く追求した。

第六章 相対化素性照合

ミニマリスト理論における素性照合理論では、①機能範疇主要部が語彙範疇の素性を照合する、②照合を要するのは統語素性であるとされている。本章では、この標準的見解に異議を唱え、次の提案を行った。(なお、素性照合は、c統御に基づくAgreeによって遂行される。)

相対化素性照合

(A) 主要部が句範疇の「統語」素性を照合する。

(B) 句範疇が主要部の「意味」素性を照合する。

統語素性に関しては、(主要部を機能範疇に限定しないことを除き) 標準的分析を踏襲しているのだが、*v* が目的語の格素性を照合するという分析には与せず、語彙的動詞 ((23) での一番下のV) が目的語の格素性を照合すると考えている。他方、意味素性には、アスペクトに関わる [限界素性]、素性として捉えられる [意味役割素性]、WH句の解釈と連動する [M(ood)素性] などがある。WH句の解釈に関わる素性は、WH疑問文に限定されるものではなく、譲歩文や感嘆文においても顕現する。

(27a. What did you buy? (WH疑問文)

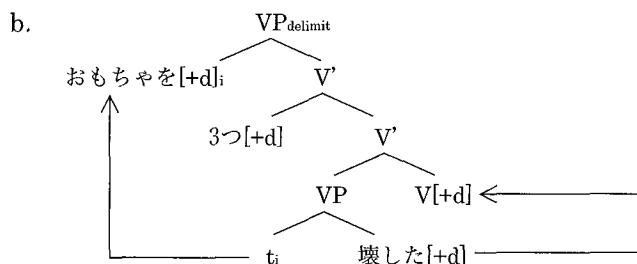
b. No matter what happened, the gentle smile remained on his face. (譲歩文)

c. What a silly book Mary bought! (感嘆文)

上述の概念化に立脚すると、第一部で抽出した記述的原則が、VP_{delimit} という説明装置によって極めて優雅に説明されることを示すのが本章の眼目である。一例として数量詞連結構文の分析を挙げておきたい。

(28a) の構造と移動は (28b) のようになっている。

(28a. (子供が) おもちゃを 3つ壊した。



[+d] は限界 (delimited) 素性を示す。VP_{delimit} は限界的事態に伴う範疇なので、その主要部Vは、定義上 [+d] 素性を有している。また、直接目的語「おもちゃ」は、事態を漸次的に (incrementally) 計測する項限定詞なので、これも [+d] 素性を具有している。そして、連結数量詞が [+d] 素性を持つことについては、これがアスペクト限定詞として機能することにより、非限界的動詞 (例えば [±限界動詞]) を含む文においても限界的事態を示すことを見られたい。

(29)a. ポリーニはソナタを1時間演奏した。

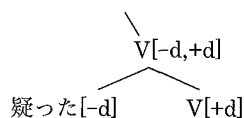
b. ポリーニはソナタを1時間で3つ演奏した。

以上の前提のもとに、(28b) において、「おもちゃ」「3つ」の有する [+d] 素性がVの [+d] 素性を照合するのである。

(30a) が非文となる理由は、動詞移動の結果現出する (30b) の構造に存する。

(30)a. *私は同僚を本気で2人疑った。

b.



「疑う」は完全な非限界動詞であるので [-d] 素性を有しているが、動詞移動により V [+d] に付加され双方の素性が濾過される時、[-d,+d] という弁別的に矛盾する素性複合体となる。ここにおいて、VP_{delimit} 中に生成される「2人」の [+d] 素性が照合されず、派生が破綻するのである。

第七章 EPPを巡って

EPPとは、TP (あるいはvP) 指定部に要素を要求する素性で、ミニマリスト理論では頻繁に援用される。しかし、そもそも正体の極めて見え難い実体であり、その素性照合に際してc統御条件が遵守されないという重大な問題もある。本論文はEPPの廃止を提案するものであるが、そうすると、従来EPPによって説明されてきた事項に対して、別の説明原理を提示する必要性が生じる。その1つに虚辞がある。

虚辞には、いわゆる仮主語のitと提示のthereがあるが、これらは意味役割を持たず、純粋にEPPのみの要請で主語位置に挿入されると考えられてきた。

(31)a. It seems that John is a spy.

b. There is a book on the table.

しかしBolinger (1977) は、広範なデータ提示に基づき、虚辞には意味があることを説得的に示している。例えば、先行する文の内容と照応関係を結ぶthatなどがある時、(32a) が非文となり、(32b) のように言う必要があるといったことである。

(32) What do you think of running him as a candidate?

a. *To do that would be a good idea.

b. It would be a good idea to do that.

このことは、虚辞のitが、先行文脈に存する実体や事象を後続文脈に注ぎ込む指示代名詞であることを

如実に示している。

他方、提示のthereでは逆の状況が成り立つ。

③a. *In the left hemisphere of the brain are centers that control the production of speech.

b. …there are centers that control the production of speech.

(33a) は講演における冒頭の発話で、centersが初めて談話に導入されるのだが、この時thereを用いない(33a)が非文となる。このことは、thereが実体や事象を新たに導入する役割を果たしていることを示している。

本章では、以上のような観察に基づき、it/thereは意味役割素性 [Ev] (event-role) を有する実体であり、照応的特質の差に応じて、it [+anaphoric] /there [-anaphoric] という指定が与えられることを提案した。そして、[Ev] は、Tの [Ev] 素性と照合されるべきものであることも論じた。すなわち、いわゆる虚辞は、EPPの要請で挿入されるのではなく、意味素性照合を果たすために併合されるのである。

EPPと言われるものには、標準的分析におけるEPP、豊かな活用形を持つ言語における動詞、そして、主題卓越型言語における主題句という、少なくとも3種の別があり、いずれも事態の開始者 (initiator) として捉えられるべきものである。このことに付随して、主格素性 [NOM] の照合、PROの問題、使役文などについても深く考察した。

第八章 二重目的語構文

本章ではまず、二重目的語構文の2つのパターンについて、その構造を(37)のように確定した。とりあえず与格型のみ示すが、受益者型も基本的構造は同一である。その根拠は(34)-(36)他で示す言語事実にある。(IO=間接目的語、DO=直接目的語、DOC=二重目的語(パターン)。また、動詞移動を省略して示す。なお、日本語には(37b)のパターンが存在しない。)

③4a. I showed John_i himself_i (in the mirror) .

b. *I showed himself_i John_i (in the mirror) .

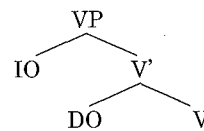
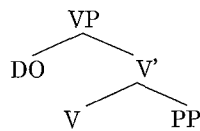
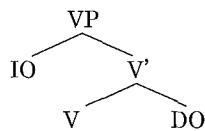
③5a. 魔法使いは王子_iに、蛙に変身した彼自身_iの姿を(鏡で)見せた。

b. *魔法使いは彼自身_iに、蛙に変身した王子_iの姿を(鏡で)見せた。

③6a. I showed John_i to himself_i (in the mirror) .

b. *I showed himself_i to John_i (in the mirror) .

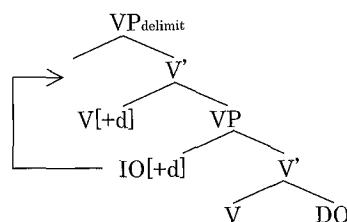
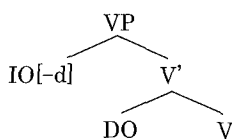
③7a. DOCパターン (英語) b. PPパターン (英語) c. DOCパターン (日本語)



第三章で論じたように、与格型については、英語では間接目的語がアスペクト限定詞になるが、日本語ではならない。すなわち、英語ではVP_{delimit}が生じるが、日本語では生じないということである。双方の言語における [+d] 素性照合は次のようになっている。

③8 a. 日本語

b. 英語



日本語では、限界素性に関して興味深いことは何も起こらないが、英語では、IO [+d] が素性照合のためにVP_{delimit}領域に移動するのである。

受益者型は、英語では間接目的語・直接目的語とも [+d] 素性を有しているので、(38b) の構造においてDOもVP_{delimit}領域への移動を果たす。他方、日本語では、IOはPPなので限定詞にならない（つまり [-d] である）が、このIOの介在が誘発する最小連結条件のために、DO [+d] の移動が阻まれ、その結果派生が破綻するのである。（なお、最小連結条件（及びAgree）に関わる「近さ」の計測についても、ECM構文の観察から詳細な議論を提示した。）

最後に受動文の振る舞いについて論じた。日本語の与格型では (39) の状況が成り立つ。(39a) は、「を」格句が残っているので本論文の基準では間接受動文であり、主語は移動を介さず最初から主語位置に基底生成される。また、(39b) はVP_{delimit}が生じない直接受動文であり、アスペクト素性については特殊なことは起こらない。（[Ev] [case] などの素性照合については割愛する。）

(39)a. 部長は局長 {に/から} 今後の方針を説明された。

b. 今後の方針が局長によって部長に説明された。

(40) 与格型

a. Mary was taught the sonata.

b. *The sonata was taught Mary.

(41) 受益者型

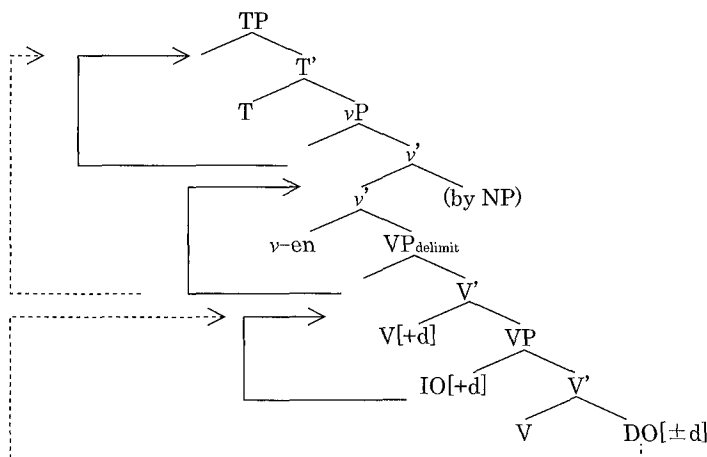
a. ?Mary was bought the book.

b. *The book was bought Mary.

(41a) は、これまでの報告では容認性が低いと言われているが、話者による判断の揺れが大きく、動詞の選択によって文法性に差がある。恐らく、何らかの ‘low level’ の要因により完全な文法性を示さないものと思われる。

さて、受益者型では次のようなことが起こっている。間接目的語は矢印で示した移動を果たす。他方、直接目的語については、[+d] の場合VP_{delimit}領域への移動は問題ないのだが、格素性が語彙的動詞（最下位のV）によって既に対格として認可されているので、主格素性を有するTとAgree関係に入ることができず、従って、VP_{delimit}領域で凍結する (freeze) と考えられる。

(42)



アスペクトの未来に向けて

最後に、今回は扱うことができなかったが、本論文の概念化の枠内に収まり得る結果構文、中国語のBA構文、中間構文、そして動詞＋不変化詞構文について今後の見通しを示した。

論文審査結果の要旨

本論文はアスペクトと統語論の関係を日英語比較統語論の観点から論じたものである。アスペクトには、英語の完了形や進行形のように文法形式によって示される文法的アスペクトと、動詞に内在化された意味によって示される意味的アスペクトの2種がある。本論文では、意味的アスペクトが研究対象となっている。

第1部（第1章から第4章まで）では、動詞の意味的アスペクト、数量詞連結構文、二重目的語構文、所有者上昇構文について重要な記述的一般化を抽出する。第2部（第5章から第8章まで）では、第1部で抽出された記述的一般化がなぜ成立するのかを問い、生成文法の極小プログラム（minimalist program）の枠組みの中でそれら的一般化に対する理論的説明を試みる。

第1章 動詞類型とアスペクト限定

本章では、未完了の逆説、「～かけの」構文その他を論拠として、到達動詞と達成動詞の峻別は二次的な区分に過ぎないことを論じ、広く引用されるVendler（1967）のアスペクトに基づく動詞の4分類を破棄し、状態動詞、行為動詞、過程動詞の3分類を提案する。行為動詞は動作に必然的な終わりが無い非限界動詞、過程動詞は必然的な終わりがある限界動詞である。

ところが行為動詞においては、John read *The Minimalist Program* for two days.が非限界的事態を表すのに対し、John pushed the cart to the station in 30 minutes.が限界的事態を表すといったことが起こり、動詞のみでは「動詞分類」が不可能なように見える。しかし、限界性の変換に関わる要因は、前者では直接目的語の解釈に、後者では付加詞（着点句）の存在に収束する。つまり、これらの項・付加詞が事態を終了させるアスペクト限定詞として機能する結果、本来的には非限界動詞であるものが限界動詞に変換されていると言える。このように、アスペクト限定を項限定詞と付加限定詞に関わる問題として捉えることにより、個々の動詞の意味のみに基づいてそれら本来の所属先を決定できると論じている。

第2章 数量詞連結構文

数量詞連結構文（数量詞遊離構文）を規制する原則について、日本語生成文法の分野では、Miyagawa（1989）の相互統御条件が定説とされてきたが、この条件には反例が多く、さらに、英語を初めとしてこの条件が当てはまらない言語が多数あることから、汎言語的に見ても問題の多い条件であることを指摘する。

本章の重要な主張は、数量詞連結構文はアスペクト性制約によって規制されるという主張である。動詞を [+限界動詞]、[±限界動詞]、[α 限界動詞]、[-限界動詞] に分類し、限界動詞はこの構文を成立させるのに対して、非限界動詞はそれが不可能であり、この両極間に [±限界動詞]、[α 限界動詞] が存在することを指摘する。そして、その容認可能性の相違をアスペクト限定要素との関係に基づいて説明する。さらに、その説明が、経路句、移動動詞、取り立て詞を含む構文、テイル文、状態述語文における文法性の相違も説明可能なこと、連結を許す数量詞がall/both/each（普遍数量詞）に限定されている英語の数量詞連結構文にも適用可能であることを説得的に論じている。

第3章 二重目的語構文

英語には与格型と受益者型の2種の二重目的語構文があるが、日本語には受益者型が存在しない。ここで指摘されている重要な記述的一般化は、日英語とも与格型を構成する動詞は非限界動詞であるのに

対して、英語では受益者型を構成する動詞は限界動詞であるが、日本語では受益者型そのものが不可能であるという事実である。

日英語の相違点として、第一に、英語の二重目的語構文では事象が必ず終了する必要があるのに対し、日本語では終了しなくてもよいという事実がある。この事実は、英語では間接目的語がアスペクト限定詞として機能するのに対し、日本語では機能しないと考えることによって説明できる。第二に、日英語において与格型を構成する「あげる/give」「支払う/pay」や、英語では受益者型となる（が日本語ではない）「買う/buy」「入手する/get」などといった、瞬間的に動作が遂行される動詞の（非）限界性を認定する必要があるが、いくつかの論拠から「開始時点基準」という新しい認定基準を抽出し、与格型を構成する上記のような動詞は非限界動詞であり、受益者型の動詞は限界動詞であるという結論を導いている。複雑な言語事実が慎重かつ詳細に吟味されている。この問題については第8章で説明が与えられる。

第4章 所有者上昇構文

本章では、所有者上昇構文における日英語の動詞句（VP）の構造を、それぞれ、[_{VP}花子を [_{VP}右足を蹴った]]、[_{VP}[_v hit Bill] on the arm]であると規定する。そして、この構造における「花子を」はVP付加詞であり、「を」は格助詞ではなく、「～について言えば」という提示機能を有する後置詞であるとする斬新な提案がなされている。また、この構文を規制する制約としてアスペクト性制約があるという新しい事実を指摘している。また、英語では、所有物が定冠詞を有し、非制限的修飾語を加えることが可能であるのに対し、日本語では不可能であるという日英語の差異を指摘している。

第5章 限界動詞句

本章では、非限界的事態を表す文と限界的事態を表す文では、そもそも句構造が異なり、後者では、*v*P/VP間に限界的動詞句（VP_{delimit}）が存在するという本書の根幹をなす主張がなされている。その構造は次のように表される。

限界動詞句の構造：

[_{NP} Subject [_{VPdelimit} [_{VP} V Object]]]

VP_{delimit}中には、連結数量詞、結果述語、着点句などのアスペクト付加限定詞（delimiter）として機能する要素が生成される。そして、目的語が項限定詞となる場合は、それがVP_{delimit}の領域に移動する。この構造を設定する根拠として、「そうする」構文、着点句と数量詞の作用域に関する事実、「も」と否定対極表現、頻度副詞と目的語の作用域など多数の証拠をあげ、説得的で強力な議論を展開している。

さらに、事態に限界点を設定し得るのは、直接内項と間接内項（付加限定詞）のみであり、外項がこれに関与しないというTenny（1994）の一般化が、この構造から簡潔に説明できること、英語の非能格動詞が自動詞であるにもかかわらず「目的語」的要素を従える（John ran his sneaker threadbare.）構造の特性が説明できること、非限界性の漢語サ変動詞では「局長が部下を叱責するのを見て、部長も自分の部下をそうした」のように目的語を残すことが可能であるが、この問題に関する意味的要因の分析などの問題を追求している。

第6章 相対化素性照合

ミニマリスト理論における素性照合理論では、①機能範疇主要部が語彙範疇の素性を照合する、②照合を要するのは統語素性であるとされている。本章では、この標準的見解に対して、その不備を克服し、

さらに広い射程をもつ下記の相対化素性照合の原理を提案することによって、第2章で指摘した数量子連結構文、第4章で指摘した所有者上昇構文に関わる記述の一般化に対して、簡潔で説得力のある理論的説明を与えている。

相対化素性照合：

- (A) 主要部が句範疇の「統語」素性を照合する。
- (B) 句範疇が主要部の「意味」素性を照合する。

数量詞連結構造「(子供が) おもちゃを3つ壊した」では、この構造に含まれる $VP_{delimit}$ が限界的事態に伴う範疇なので、その主要部Vは定義上 [+d] 素性を有し、直接目的語「おもちゃ」は、事態を漸次的に計測する項限定詞なので、これも [+d] 素性を有している。そして、[+d] 素性を持つ連結数量詞「3つ」と「おもちゃ」の有する [+d] 素性がVの [+d] 素性を照合することによって認可される。一方、「*私は同僚を本気で2人疑った」では、「疑う」は非限界動詞であるので [-d] 素性を有している。したがって、 $VP_{delimit}$ 中に生成される連結数量詞「2人」の [+d] 素性が照合されず、派生が破綻する。

第7章 EPPを巡って

EPP素性は、ミニマリスト・プログラム分析で頻繁に用いられるが、その正体はよくわからないのが現状である。本章ではEPPの破棄を提案し、それに伴って生じる虚辞のitとthereの問題について論じている。itとthereは従来意味を持たない虚辞であり、EPPの要請に基づいて主語位置に挿入されると考えられてきた。しかしこれらの要素は、実は意味をもち、itは先行文脈に存する実体や事象を後続文脈に注ぎ込む指示代名詞であり、thereは実体や事象を新たに導入する役割を果たすと述べている。そして、そのような観察に基づき、it/thereは事象意味役割 (event-role) 素性をもち、照応的特質の差に応じて、it [+anaphoric] /there [-anaphoric] という指定が与えられる要素であると主張する。すなわち、いわゆる虚辞は、EPPの要請で挿入されるのではなく、意味素性照合を果たすために併合される要素である。

第8章 二重目的語構文

第3章で、英語では与格型において間接目的語がアスペクト限定詞になるが、日本語ではならないこと、および、英語には受益者型が存在するのに対して、日本語には存在しないことを指摘した。本章では、二重目的語構文に対して2つのパターンの構造を提案することによって、日英語の二重目的語構文に見られるこのような相違を説明している。その構造に基づくと、英語では間接目的語・直接目的語ともに [+d] 素性を有しているので、DOが $VP_{delimit}$ 領域へ移動できるが、日本語では、IOがDOと $VP_{delimit}$ 領域の間に介在するために、最小連結条件によりDO [+d] の移動が阻止され、その結果派生が破綻する。したがって、日本語には受益者型の構文は存在しないことが説明される。

以上のように、本論文は日英語の比較統語論の視点から意味的アスペクトを中心軸として、動詞の特性、数量詞連結構文、二重目的語構文、所有者上昇構文などについて記述の一般化を抽出するとともに新事実を指摘し、その解明のために説得的で力強い議論を展開し、さらに、現在の生成文法理論の問題点を克服するために新しい理論的提案も行っている極めて高い水準の研究である。

よって、本論文の提出者は博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。